

山本山古墳群

静岡県袋井市豊沢字山本所在

1 9 7 8

袋井市教育委員会

山本山古墳群

静岡県袋井市豊沢字山本所在

1 9 7 8

袋井市教育委員会

序

袋井市は昭和44年東名高速道路袋井インターチェンジが建設されて以来、高度経済成長に伴い、市内開発が進む中で調和のとれた都市づくりをめざして、農業基盤整備事業を推進してきた。

文化財についても、これまで数多くの遺跡が発掘されており、市民の文化財の保護・顕彰への関心も高まっている。

この発掘調査は、県営農地開発事業として、袋井市豊沢区域内の農地開発事業施行に際し、採土工事中に古墳が発見されたため磐田土地改良事務所の委託により、袋井市教育委員会が実施したものである。調査は、静岡県教育委員会社会教育課の平野吾郎氏、同課・佐藤達雄氏、袋井市教育委員会社会教育課・川井正一を中心に国学院大学学生・犬塚君、静岡大学学生・恵美名君の協力を得て、昭和49年10月2日より11月27日までの間、行われたもので、さらに浜松市博物館の川江秀孝氏、静岡県教育委員会社会教育課・寺沢義昭氏のご協力と地元・大谷純仁氏の多大なご協力をいただいた。ここに諸氏のご協力に深く感謝を申し上げます。

なお、本書が専門家のみならずのみなさんへ広く文化財に関心の深い方々に貢献することができれば幸であります。

昭和50年3月20日

袋井市教育委員会

教育長 山崎 恭一

例 言

1. 本書は昭和49年9月～10月にかけて実施された袋井市豊沢所在の山本山古墳群の調査報告である。
2. 本調査は袋井市豊沢地内の農地開発事業に伴う緊急調査で磐田土地改良事務所の委託により、袋井市教育委員会が実施した。

調査主体：袋井市教育委員会

調査期間：昭和49年 9月27日～11月27日（20日）

調査員：平野 吾郎 静岡県教育委員会社会教育課

佐藤 達雄 “ ”

川井 正一 袋井市教育委員会社会教育課

補助員 犬塚 敏雄 国学院大学

恵美名 八夫 静岡大学

ほかに県教委社会教育課 日比野秀男氏の応援を得た。

3. 資料の整理は主として佐藤、平野が行ったが、鉄器の保存処理・実測については、浜松市郷土博物館 川江秀孝氏の協力を得た。
4. 写真・実測図等の資料は県教育委員会に、出土遺物等は袋井市教育委員会に保管される。
5. 調査に伴う事務は袋井市教育委員会が担当した。
6. 本書の執筆分担は次の通りである。

平野 吾郎 第I章、第IV章3

川井 正一 第II章

佐藤 達雄 第III章、第IV章1・2・4、第V章

7. 付載1・2については、大谷純仁氏に資料の提供をうけ佐藤が浄書構成した。
8. 付載1の上器の実測は、川井・佐藤が行い、佐藤が浄書した。
9. 本書の編集は、平野・佐藤が行った。

目 次

I 調査に至る経過	1
II 遺跡の位置・環境	1
1. 地理的環境	1
2. 歴史的環境	2
III 調査の経過	4
IV 調査の概要	8
1. 第5号墳	8
2. 第6号墳	8
3. 第7号墳	11
4. 第8号墳	18
V ま と め	18

付 載 1 山本山古墳群・昭和32年の調査

I は じ め に	21
II 調査日誌抄	21
III 各墳の概要	25
1. 第1号墳	26
2. 第2号墳	28
3. 第3号墳	29
4. 第4号墳	30

付 載 2 過去の出土遺物

1. 袋井中学校所蔵遺物	32
2. 袋井小学校所蔵遺物	33

挿 図 目 次

第 1 図	位置図 (周辺古墳分布図)	3
第 2 図	地形図	5
第 3 図	第 5 号墳 実測図	8
第 4 図	第 6 号墳 実測図	9
第 5 図	第 6 号墳 出土遺物実測図	11
第 6 図	第 7 号墳 根石・掘り方実測図	12
第 7 図	第 7 号墳 実測図	13
第 8 図	第 7 号墳 出土遺物実測図 1 (土器)	15
第 9 図	第 7 号墳 出土遺物実測図 2 (鉄器)	16
第 10 図	第 8 号墳 実測図	17
第 11 図	第 1 号墳・第 2 号墳 地形図	25
第 12 図	第 1 号墳 実測図	26
第 13 図	第 1 号墳 出土遺物実測図	27
第 14 図	第 2 号墳 実測図	28
第 15 図	第 2 号墳 出土遺物実測図	29
第 16 図	第 3 号墳 出土遺物実測図	29
第 17 図	第 4 号墳 地形図	30
第 18 図	第 4 号墳 出土遺物実測図	31
第 19 図	袋井中学校所蔵遺物実測図	32
第 20 図	袋井小学校所蔵遺物実測図	33

図版目次

- 図版 I 遺跡遠景
遺跡近景
- 図版 II 第5号墳・第6号墳
第6号墳 封鎮石
- 図版 III 第6号墳（上より）
第6号墳 封鎮石（内側より）
- 図版 IV 第6号墳 玄室内部
第6号墳 出土遺物
- 図版 V 第7号墳 調査前の状況
第7号墳 石室内部
- 図版 VI 第7号墳 土器出土状況
第7号墳 鉄錐出土状況
- 図版 VII 第7号墳 掘り方及び根石の状態
第7号墳 出土遺物（鉄器）
- 図版 VIII 第7号墳 出土遺物（土師器）
第7号墳 出土遺物（須恵器）
- 図版 IX 第8号墳 正面
第8号墳 完掘状態
- 図版 X 山本山古墳群 全景（昭和38年撮影）
- 図版 XI 第1号墳 石室
第1号墳 奥室
第1号墳 土器出土状態
- 図版 XII 第1号墳 出土遺物
第2号墳 出土遺物
- 図版 XIII 第4号墳 石室
第4号墳 土器出土状態
第4号墳 出土遺物（玉類・刀子）
- 図版 XIV 第4号墳 出土遺物（須恵器）
- 図版 XV 袋井小学校所蔵遺物

I 調査に至る経過

昭和49年6月、袋井市豊沢地区の住民から採上工事中に古墳が発見された事が、袋井市教育委員会に報告された。袋井市教育委員会で現地調査をおこなったところ、玄室の大半を削り取られ、封鎖部分に近いところを残した横穴が、2基程発見された。この地域は古くから菩提山古墳群の名で呼ばれていた古墳群に属するところであり、他にも古墳群の存在が予想された事から、工事の中止を要請すると共に県教育委員会と前後策の協議をおこなった。工事そのものは個人の採土によるものであるが、区域全体が、県営農地開発事業区域に含まれていること、それにより削平を要する区域の土を畑地への客土として必要な農家が採土している事等が判明した。従って工事計画区域全域の分布調査を実施すると共に、県教育委員会・袋井市教育委員会・静岡県磐田土地改良事務所の三者による協議をおこなった。その結果

1. 工事区域内に含まれる前方後円墳を含む8基の古墳は工事対象区域から除外する。
2. 工事区域の中心である山本山の区域にある古墳は発掘調査をおこない、記録保存を計る。
3. 存在を確認している3基の他に古墳あるいは横穴の存在が予想されるので、確認の調査をおこなう。
4. 調査に要する費用は全額磐田土地改良事務所で負担する。

以上4項について合意に達した。発掘調査は袋井市教育委員会が主体者となり実施することになったが、袋井市では同時に都市区画整理事業により消滅する狐塚古墳の発掘調査を実施しており、これが長期にわたる事が明らかで、両者を同時に実施する事ができなかった。そこで、こうした場合一般的行動様式と言っても良い程になっている「発掘調査をしてくれる人」を八方探しだが「調査を引き受けてくれる人」を得る事はできなかった。削り取られた古墳の断面は崩壊を続け、このままおけば消滅という事態も起きかねない様子になったので、やむなく県教委から佐藤が現地調査に出掛ける事にし、9月後半より発掘をおこなう事にした。

現地発掘調査は佐藤達雄・川井正一の両名が学術担当者となり、平野吾郎が応援した。又調査には国学院大学学生犬塚敏雄・静岡大学学生志美名八次の両君の応援を得、又地元豊沢部落の人々に作業の協力をいただいた。

なおこの古墳群はかつて菩提山古墳群の1部に含まれていたが、地名が菩提とは異なり、又古墳群そのものも小さく分けて考える事ができるので、大谷純仁氏の提唱により、地名及び丘陵の名を取ってこの古墳群を山本山古墳群と呼ぶことにした。

II 遺跡の位置・環境

1. 地理的環境

東海道本線袋井駅の南方から、東方に向けて、小笠沢川によって開かれた大きな開折谷がのびている。この谷を約5kmほど入った附近、法多山尊永寺の南方で、この谷が2つに分かれる。この2つの谷にはさまれた、東西に伸びる丘陵が山本丘陵である。この丘陵の先端部に近い稜線上

及び南斜面上部に、本古墳群は築造されている。本古墳群の地籍は、袋井市豊沢山本に属する。

本古墳群の所在する附近は、第3紀鮮新層を基層とし、洪積層の砂礫層からなる小笠山塊の西北麓にあたり、断折谷の発達が顕著で、大小無数の丘陵が形成されている。本古墳群の所在する丘陵も、このような丘陵末端に近い支丘陵の一つである。この山本丘陵は、最頂部で標高260 m 前後、基層幅約1 km、長さ約3 kmとやゝ大型であり、北側丘陵帯には小笠沢川が東西に流れている。また、洪積層の砂礫層はすでに侵蝕され、頂部附近に堆積が認められるのみで、全体には鮮新層の露頭が看られる。

2. 歴史的環境

本地域に原始時代の遺跡が見い出されるのは、縄文時代後期からである。縄文文化遺跡は2ヶ所確認されており、正式な調査が行なわれたものは無いが、表面採集遺物等からおおむね後期の所産によるものと看取される。

弥生文化遺跡は、本古墳群の附近の小笠沢川上、中流域には目下のところ確認されていないが、小笠沢川下流域、及び原野谷川の沖積地や、沖積地に面した低い丘陵の先端部に存在している。1970年度に実施された埋蔵文化財分布調査結果によれば、9ヶ所の遺跡が確認されており、そのうち地蔵ヶ谷方形台状築、愛野向山遺跡、狐塚遺跡等が、各種開発工事に伴い発掘調査が実施され、狐塚遺跡のように弥生時代中期後葉まで遡るものもあるが、多くは弥生時代後期の遺跡である。

古墳時代に入ると、原野谷川流域の低い台地上や河岸段丘に、土師器、須恵器を出土する遺跡があり、代表的なものとして狐塚遺跡、三門遺跡等がある。当地域には、前述のような聚落跡以外に、約200基の高塚墳と、約60基の横穴墓とが存在し、一大古墳群を形成している点に特色

周辺古墳地名表

番号	遺 跡 名	住 所	備 考	番号	遺 跡 名	住 所	備 考
1	川田古墳群	袋井市下山梨川田	円6	18	宇佐八幡境内2号墳	袋井市国本岡山	前方後円
2	通ヶ谷古墳群・横穴群	久能通ヶ谷	前方後円1. 円8.横穴9.	19	石ノ形古墳	“ “ 北原川	円
3	久能東山古墳群	“ “ 東山	前方後円1. 円6.	20	岡津原古墳群	掛川市岡津岡津原	円6
4	東別所古墳群	“ “ 蟹津西ノ谷	前方後円1. 円2.横穴3.	21	奥ノ原古墳	“ “ 奥ノ原	前方後円?
5	天白古墳	“ “ 天白	円2.横穴1	22	神明塚古墳	“ “ 岡津原	円
6	境前古墳群	“ “ 村松境前	前方後円	23	岡津八幡境内古墳群	“ “ “	円4
7	石原沢1号墳	“ “ 石原沢	円2.横穴1	24	岡津横穴群	“ “ 大治ヶ	横穴24
8	“ “ 2号墳	“ “ “	円	25	向山古墳群	掛川市岡津向山	円2
9	金塚1号墳	掛川市各和	円	26	西岡津古墳	“ “ 西岡津	円
10	各和金塚	“ “ “	前方後円	27	本村古墳群	“ “ 高御所	円2
11	金塚2号墳	“ “ “	円	28	水村横穴群	“ “ “	横穴15
12	宮ヶ谷横穴群	袋井市村松登ヶ谷	横穴110	29	押出横穴群	“ “ 押出	横穴12
13	東山古墳群	“ “ 国本東山	円2	30	大代谷古墳群・横穴群	“ “ “	円2.横穴44
14	渡間山古墳	“ “ 藤現山	前方後円1	31	八幡神社脇古墳	“ “ 藤場	横穴
15	永源寺境内古墳	掛川市各和	円	32	城山横穴	“ “ 高御所	横穴
16	藤現山古墳	袋井市国本藤現山	前方後円	33	丈山古墳群	“ “ 藤場・平野	円7
17	宇佐八幡境内2号墳	“ “ 岡山	円	34	石作古墳群	袋井市愛野石作	前方後円1



第1図 位置図(周辺古墳分布図)

番号	遺跡名	住所	備考	番号	遺跡名	住所	備考
35	愛野向山古墳群B群	袋井市愛野向山	円5 前方後円1. 円12	48	高尾向山古墳	豊ヶ谷 袋井市高尾向山	前方後円1 円5
36	" A群	" " "	前方後円1. 円11.横穴3	49	雲座古墳群	" 豊沢雲座	前方後円1. 円17
37	金山古墳群・横穴群	袋井市豊沢金山	円7.横穴5	50	宝野金山古墳	" " 宝野金山	円
38	熊垂神社古墳群	" 高尾東谷	円7	51	長者平古墳群	袋井市豊沢北方長者平	前方後円2. 円18
39	井守塚古墳群	" " 井守塚	円5	52	駒ヶ谷古墳群	" " 駒ヶ谷	前方後円2. 円13
40	地蔵ヶ谷古墳群・横穴群	" " 谷田	円5.横穴33	53	菩提山古墳群	袋井市豊沢菩提山	円2.横穴1
41	大門山古墳	" " 東谷	前方後円1. 円12	54	山本山古墳群	" " 山本	前方後円1. 円8.横穴4
42	能光寺境内古墳	" " 小野田	円	55	近江谷古墳群	" 岡崎近江谷	円3
43	大門大塚古墳	" " 大門	円				
44	狐塚古墳	" " 掛の上	前方後円 円				
45	御所森古墳	" " 三門	円3				
46	谷坂古墳群	" " 向山谷	円				
47	養ヶ谷古墳群	" " 向山	円14				

が存される。

即ち、①原野谷川南岸に、前方後円墳の狐塚古墳、円墳の大門大塚古墳（静岡県1930）御所森古墳、前方後円墳を盟主とし円墳十数基からなる地蔵ヶ谷古墳群（平野1963、昭和46年袋井市教育委員会で調査）、愛野向山古墳群、若作古墳群、方墳と円墳数基からなる金山古墳群（昭和47年袋井市教育委員会で調査）等があり、②小笠沢川北岸には、前方後円墳を主座とし円墳十数基からなる長者平古墳群、駒ヶ谷古墳群、円墳数基からなる菩提山古墳群等がある。又、③小笠沢川南岸には、前方後円墳と円墳からなる雲座古墳群（川井1972）、高尾向山古墳群、円墳だけの響ヶ谷古墳群、八坂古墳群（大谷1965）等がある。

これらはいずれも後期群集墳であるが、このうち、地蔵ヶ谷、金山、雲座の各古墳は、内部主体が木棺直葬で、5世紀代末葉から始まる初期の群集墳である。これに対し、長者平、駒ヶ谷の各墳は、内部主体に横穴式石室を有する7世紀代前半に中心をおく群集墳である。出土遺物は、須恵器、直刀、鉄鉾等が主なもので、鏡、馬具類等多量の遺物を出土した大門大塚古墳を除くと、一般的に質、量ともにきわめて乏しい。

更にこの地域には、高塚墳と共に横穴の併存がみられ、地蔵ヶ谷、金山、菩提山及び木古墳群に存在する。このうち、地蔵ヶ谷には、築域は共有しているが、墓門の前面に長い墓道を有し、個々が独立した古式の構造を示すものがある。しかし、他の多くは3～5基が墓前域を共有する形態を呈し、須恵器第Ⅳ型式前半に築造されたものである。横穴からの出土遺物は、須恵器が圧倒的に多く、他の鉄器類は非常に少なく、その中で地蔵ヶ谷9号穴の金銅製飾金具は注目される。

III 調査の経過

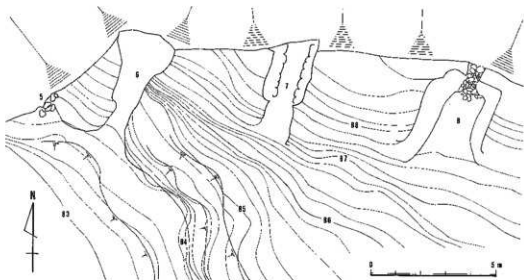
通称“山本山”と呼ばれるこの丘陵には、かなりの古墳があったらしい。1970年実施の分布調査の報告によれば前方後円墳1を含む10基の円墳が、記録されている。この丘陵は古くから採土がおこなわれており、丘陵端はなしくずし的にけずり取られてきた。これらの採土の際かなりの遺物が採集されており、その一部は地元の小学校に保管されていた。（付載2）

このような形での遺跡の消滅をう렐いた大谷純仁氏等は、昭和32年、同学院大学教授樋口清之氏の指導をおおぎ、発掘調査を実施した。昭和32年12月21日～30日の10日間の調査で部合4基の古墳の調査をしている。（付載1）*

その後、豊沢地内の農地開発事業に伴いその工事中に今回の4基が発見され調査が実施されることとなったわけである。

今回調査の4基と前回の4基との位置関係は、前回調査のポイントが失われており正確にはわ

* 今回の調査で山本山古墳群はほぼ消滅した訳である。その総括の意味も含め、関係者の了解を得て、それらの遺物、調査資料を付載1、2として収録した。これらをあわせて、山本山古墳群の全様をとらえていただきたい。



第2図 地形図

からない。大谷純仁氏によれば、今回調査の4基は昭和32年調査の4基の東にすぐつながるようである。

調査日誌抄

今回の調査は、平野・佐藤ともに、それぞれの仕事を持ちながらの作業であり、基本的には必ず1人は現場にいるようにしたが、両名の出張が重なったりして1週間の休みの期間をおくなどその調整に非常に苦慮した。以下調査日誌をもととしながら作業の経過を追ってみよう。

9月27日（金）雨

袋井市教委の用意した車で発掘機材を搬入する。袋井市教委にて打合せ、一輪車・スコップ等の器材を現場へ運ぶ。法多山門前、山川館に宿泊、ここを基地とする。

9月28日（土）晴

8時現地集合。調査に先だち全景の写真撮影、および周囲の草刈りを行う。9時40分より法多山群永寺の住職大谷純仁師により調査関係者一同参列し供養を行ったあと、10時より本格的作業にはいる。

第8号墳より作業開始。主体部分はずでに失われ封鎖部分をわずかに残すのみである。掘り込みを確認するため表土及び茶褐色土層をはぐ。茶褐色土層は断面で最高厚5cm程でその広がりはずかずであり、性格をつかむことはできなかった。掘り込みは黄褐色土層では確認できず、粘土質

※ 今回の調査では当初古墳の呼び名を東から1号～と呼んでいたが、前回調査との関係から、西から5～8号と呼びかえることとした。以下の記述は昭和32年調査1～4号、今回の調査5～8号とする。また石室を持った古墳と横穴とは区別して番号を付すべきであったが、整理の都合で便宜上通連番号を付している、そのまま用いた。現在、県教委で遺跡台帳の整備を進めており、それを待って正式名称としたい。

のバンドを含む黄褐色上層を掘り込んでいる。

9月30日(月) 晴

尾根上の円壇らしき部分、及南側斜面の草刈り。ここに所在確認のためのトレンチを入れる予定。

10月1日(火) 曇り

8号墳の墓前城の広がりを追う。封鎖石は上段と下段では積み方が異なり、上段のほうが小さな石を用いている。墓前城には5～6個の浮き石がみられる。

10月2日(水) 晴

8号墳の作業を継続。墓前城の広がりを追う。東側は一部ブルで押されてけずられている。

10月3日(木) 雨のち曇り

午前中、小雨の中で、尾根上の円壇らしき部分の地形測量を行う。明確な盛り上がりはみられず、コンターは流れている。しかし確認のため、中央部に東西のトレンチを設定。(1m×6m) 午後にはいい天候が回復したので、6号・7号墳間の表土のはぎ取りを行う。本日より、犬塚君の応援をうる。

10月4日(金) 晴れ時々曇り

6号付近表土はぎ取り作業。午後より静岡大学生恵美名君の応援を得る。

10月5日(土) 晴

8号：主体部分は土取りによって全て持ち去られ、封鎖石の一部を残すのみである。墓前城を清掃し写真撮影。

7号：石室内に落ち込んだ石を排除。石室内西側壁近くより鉄鍬出土。

6号：玄室内に落ち込んでいる土を排除。床面には偏平な川原石を敷きつめてある様子である。北隅より平瓶出土。側壁は非常にもろく作業困難。

10月7日(月) 晴

7号：石室内清掃。鉄鍬、刀子、土師器、須恵器平瓶2点出土。

6号：玄室内清掃。側壁は非常にもろく次々と崩れ落ちてくる。危険でもあるので、上部より大きく土を切り落とす。この土の排除に終日を費す。併行して墓前城の土を除去。封鎖石は若干崩れているところがあるがほぼ完全に残っている。まだ掘り足りないが崩れるおそれがあるので、とりあえずそのままにしておく。

Aトレンチ(尾根上トレンチ)：トレンチ西側で石室の上面らしき石組が認められる。確認のためトレンチを南北に1mずつ拡張。南北に長く、長さ約2.5m、巾80cmあまりの範囲に川原石が集中している。上面で表土より10cmあまりの深さである。

10月8日(火) 雨

雨のため作業休止。7号墳だけはシートをかけて雨を防ぐ。事務連絡のため静岡に出向く。

10月9日(水) 晴

7号：シートをかけたのであるがそれでも大分雨水が入りこんでいる。午後より内部を清掃。

Aトレンチ：石室らしき石組みの上面を露出させる。単なる石の集積されたものである可能性が強い。念のため写真撮影。

位置を知るため基準点の標高を出す。

10月10日（木）晴

各墳とも、清掃作業も終わりに近づき実測にはいる。横穴の所在確認のため南側斜面で比較的フラットな面をもった部分2ヶ所に2m×5mのトレンチを入れる。（西側よりBトレンチ、Cトレンチとする。）

10月11日（金）晴

8号：実測を開始するが他の作業に時間を取られ全く進まず。

7号：石室内清掃。写真撮影。

6号：内部の清掃、封鎖石の内側下部より須恵器広口壺出土。写真撮影。

Aトレンチ：石組みの一部分を掘り下げるが石の集積は下部には続かずまた掘り込みも認められない。結局、古墳の施設とは認められず単なる石の集積と判断する。

10月12日（土）雨

雨のため袋井市用意のシートを石室上につけ、1週間の休みとする。

10月21日（月）晴

作業再開。

6号：崩れやすい土のため1週間の休みの間にかなりの量の土が崩れ落ちている。これを排除して清掃、実測の準備にかかる。

10月22日（火）雨

雨天のため作業中止。

10月23日（水）晴

6号：実測、玄室部分平面図及断面図作成。

7号：実測、平面図作成

8号：実測、平面図・断面図作成。

10月24日（木）晴

日比野氏の応援を得て付近の地形測量を行う。7号は実測を継続、遺物を取り上げる。（鉄器・土師器3点）

10月25日（金）晴

5号：実測完了。わずか5個の石が残るのみでとうとうその性格はわからず。

7号：掘り方部分を図に入れ実測完了。写真撮影。さらに根石を取り除き完掘状態の写真を撮影し調査終了。

10月26日（土）晴のち曇り

昨夜犬塚君、学校の関係で帰京。実測を継続。

6号：封鎖石部分実測。平面図作成。

7号：実測図補正。

8号：封鎖石部分断面図作成。

10月27日（日）雨のち曇り

朝雨で作業ができないかと心配したが、11時頃より回復に向う。6号の実測を継続、封鎖石部分断面図作成。

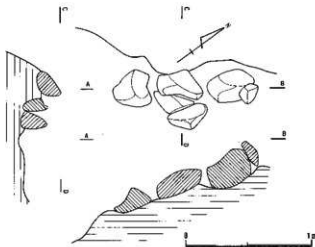
実測を終了し、写真撮影ののち器材を整理調査を終了する。

IV 調査の概要

1. 第5号墳

そのほとんどが失われてしまっており、わずかに6個の石を残すのみである。封鎖石の残部と考えられる。6号とはほぼ同じレベルにありこれとの関連が考えられるが、その様相は全くつかみえなかった。

発見者の話によれば背面より見て、大きな穴が2つあいていたとのことであり、これが5・6号であるとすれば、墓前域を共有する横穴群と考えてよいであろう。



第3図 5号墳実測図

2. 第6号墳

遺構

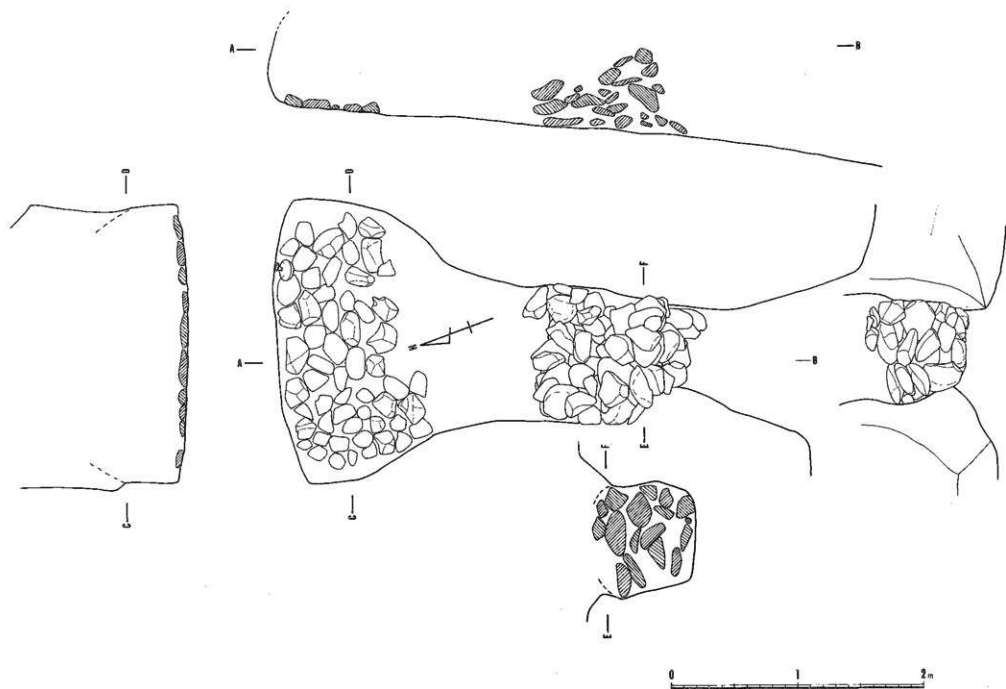
玄室部分奥行130cm、巾223cmと横長の方形プランを持つ横穴である。砂質土層を掘り込んでおり、非常に崩れやすく、天井部分はすでに失われ、側壁も剥落し確認できるのは床面より高さ20cm程度である。背面からの工事で天井・側壁部分はこわれたが、ブルの位置が高かったため、かろうじて平面形を確認することができた。床面は10～20cm程度の扁平な河原石を敷きつめて棺床としている。封鎖部分はほぼ完全に残されており、巾約80cm高さ約80cmで112個の河原石で構成されている。

遺物

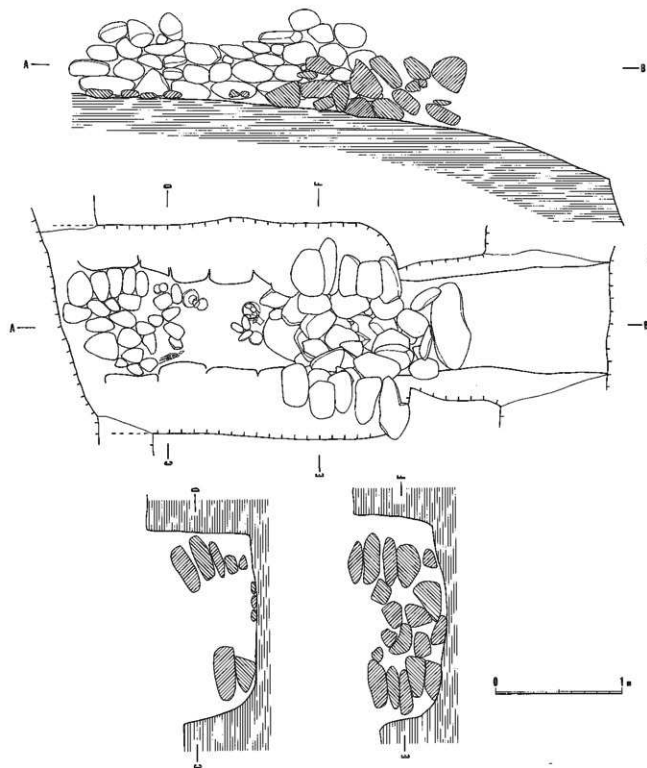
封鎖石裏より広口壺1点（第5図1）、玄室北東隅より平瓶1点（第5図2）が出土した。

広口壺は高さ13cm、口径8.6cm、最大径14.4cm、肩部及び内側底部に緑色の自然釉がかかる。胴部が張り一条の沈線めぐるして肩部とを分けている。底は丸底でヘラにより整形されている。

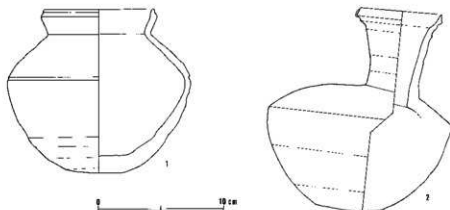
＊ その後、調査までの間に崖面が崩れ落ち調査時点ではわずかに6個の石を残すだけであった。崩落土中には河原石が多数認められたが、遺物は採集できなかった。



第4图 第6号填实测图



第7图 第7号坑实测图



第5図 第6号墳出土遺物実測図

半瓶は高さ16cm、胴部最大径14.6cm、頸部の高さ6.4cmを測る。頸部はかなり直立し口縁は外反する。口径6.4cm。口縁下に2段の沈線がめぐる。焼成良好で頸部及び胴部上面に黄緑色の釉がかかり、胴部には焼成時における他製品の一部と思われる土が付着している。他に用途不明の角製品がある。大きさ等から刀子の柄かと思われる。

3. 第7号墳

丘陵の頂部から南斜面にかけて存在する古墳で、先にも述べているように、探土工事によって石室の奥の部分はすでに削り取られており、両側壁が露出した事によって発見されたものである。6号墳と8号墳のほぼ中間に位置しているが、石室床面のレベルが海拔約87.5mと他の横穴より高いところに位置しており、調査された円墳の中でも丘陵の最も高いところに位置している。

探土工事断面での観察によれば、墳丘の盛土は認められず、腐蝕上である表土を除いた直下は地山であつた。又表面に石室の側壁の1部が露出しており、墳丘封土・周溝等、墳丘規模を推定し得るものは発見されなかった。鳥田市水掛渡古墳群あるいは又川古墳群、森町円明寺古墳群等に見られるように、地山を掘り込んで石室を築き、墳丘は石室をわずかに覆う程度でほとんど盛土もなく、楕円形の墳丘を成す例があるので、7号墳もそうしたものに近い、極く小形の墳丘を持ったものであろう。

石 室

先にも述べたように石室の奥側は探土工事によって失われており、封鎖石の外側から約3m程の部分が検出されたのみである。巾は70cm～80cmであり、平面形はほぼ長方形で、側壁には凹凸はさほどない。石室は根石に大型の河原石を使用しており、側壁も同じように河原石を使用し、小口積にしている。側壁は4段～5段の石が残り、現存高さ70cm程である。最上段は地表近くまで達しており、崩れている部分を想定しても、これと大差のないものであろうと思われる。側壁の持ち送りは全くなく、上から根石まではほぼ直線的である。天井石は通常の横穴式石室に見られる偏平の板石を架けておらず不明である。先に述べた水掛渡古墳群のように石室内に多量に円礫が落ち込んでいる例があり、天井部の構造の検討に1つの手懸りとなろう。

封鎖石は河原石を多量に使用しており、巾約1.5 m程にわたって、ほぼ三角形を成すように積まれている。高さは最も高いところで50 cm前後である。石室の奥側に径15 cm～20 cm程の偏平の河原石が敷いてある。石室入口の封鎖に近い部分の70 cm程の範囲にはなく、この敷石はおそらく棺台と類似した機能を持ったものであろう。

遺物出土状態

石室内より須恵器2点・土師器3点・鉄銚14本が出土している。

須恵器 封鎖石の内側、石室のほぼ中央近くに平瓶が1個体分出土している。崩壊してきた封鎖石あるいは側壁の石によって打壊され、破片になっている。他の1個は敷石の始まるところの右側壁近くに出土している。ほぼ完形である。

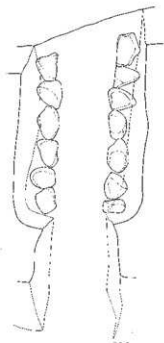
土師器 4個体の土師器が出土している。保存状態が悪く、胎土はボロボロになっており、乾燥するのを待って、かろうじて取り上げる事ができた。封鎖石内側の石室中央部近くに出土しており、他は右側壁寄りであった須恵器の近くから出土している。

鉄銚 石室の左側壁寄りに矢尻を南に向けて一括して出土している。発掘当初は鉄銚の固りで何本あるか明らかでなかったが、整理の結果14本分である事がはっきりした。何型式かの鉄銚を含んでいるが、出土状態の観察により、有機質の材質による紋等に入れたまま納められたものと観ることができる。従って、それらは、埋葬時の位置を保っていると理解できることから、この期の鉄銚の様子を知る事のできる良好な資料であると思われる。

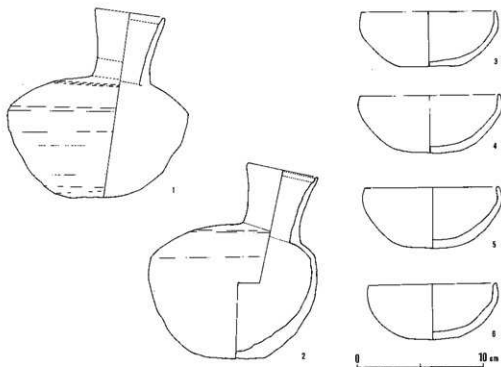
石室根石および掘り方

側壁の根石は先にも触れたように、大型の河原石を使用し、平積にしているが、不整形の石の表面を揃えて、ほぼ平らになるようにしている。石の側壁は7個が残っており、表道に最も近い1個は、他とは直角になるように積んであり、小口積になっている。左側壁は6個の石が残っている。根石は石室の奥側から積んでいるようであるが、実測図の奥壁寄り2番目の石の積方に多少変化がある。

石室の掘り方は羨門部分で両側に広がる所謂両袖式に掘られており、巾は上面で170 cm、底部で120 cm前後であって、袖の部分から奥までほとんど差がない。深さは掘り方の東側で80 cm、西側で60 cmである。これは上面が地山の傾斜の影響を受けていることによるものであり、底部は平机である。石室は掘り方の底部から築かれており、石室の内側の面が墓道の内側の面と一致している。



第6図 第7号墳根石・掘り方実測図



第8図 第7号墳出土遺物実測図1(土器)

従って石室の中は墓道中と一致することになり、無袖の石室という事になる。又掘り方は奥壁から羨道にかけて、多少傾斜しており、残っている石室の奥の部分から石室の端(封鎖の下部)あたりまでで約15cm程の差がある。羨門から先は2m程の長さの墓道が続いている。墓道の中は上面で120cm、底部で70cm程であり、南に出るに従って開き気味である。その先は丘陵の自然傾斜に入り消滅している。

遺物

7号墳より出土した遺物は須恵器平瓶2個、土師器杯4個及び鉄鍬14本である。他の遺物は不明であるが、石室の奥寄りが採土工事によってすでに削り取られており、恐らく、埋葬の主体部が崩落していると思われるので、かつては装身具等の存在を予想し得るかも知れない。

須恵器1(8図1) 平瓶 石室内から出土したもので完形である。肩部に2段・3条及び2条の沈線を施している。明灰褐色を呈し、肩部に緑色の自然釉がかかっている。

2(8図2) 封鎖石の奥から出土したもので、細片になっていた。色調は灰褐色を呈し、底部のみ灰色である。肩部に2条の沈線を施している。胴下半部は機械による引上げの後寛整形をおこなっている。①・②ともに遠江における須恵器編年第Ⅲ後半～Ⅳ前半に比定し得るものであろう。

土師器 4個体共に杯である。共に保存状態が悪く、土器の乾燥を待って取り上げる事ができた。器面にバインダー18を塗布することによって、土器の崩れるのを防いでいる。従って器面等の詳細な観察は不能である。4個体共に器面成形、焼成等良く似ており、胴部に多少の張りがあ

り、口縁部が内傾している。又底部と胴部の間で粘土を縫い合っているようである。

1 (8図3) 口径10.1cm、最大径10.9cm、器高4.4cm、色調は明褐色、保存状態が悪く、非常に脆い土器である。口唇部の大半は崩れ1部のみ残っている。

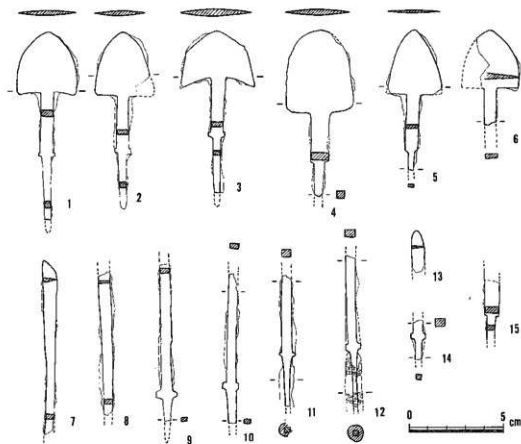
2 (8図4) 口径10.2cm、最大径11.4cm、器高4.5cm、色調は明褐色、保存が悪く、器面の剥落が著しい。口唇部が失なわれており、口径及び器高は推定である。

3 (8図5) 口径10.2cm、最大径11cm、器高4.8cm、色調は明褐色であり、保存状態は悪く、非常に脆い土器である。胎土は良く精製しているが、小石を少量混えている。口唇部が失なわれており、口径、器高は推定である。

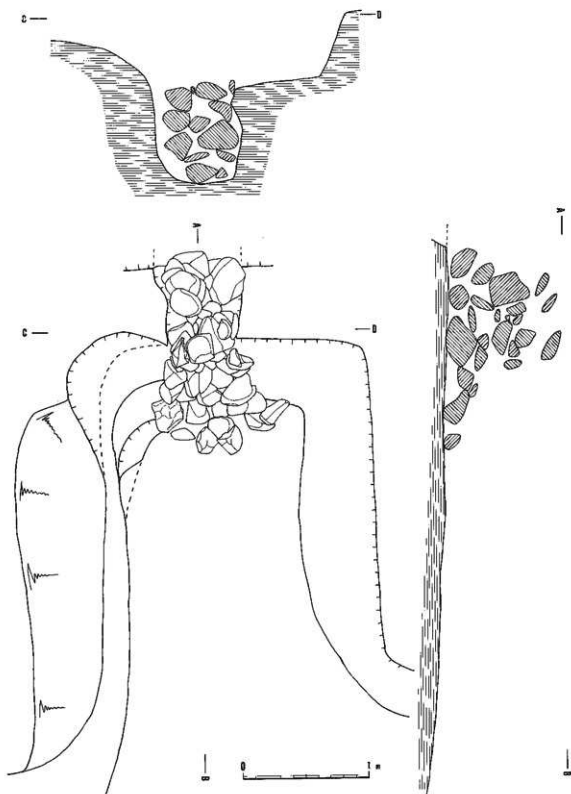
4 (8図6) 口径9.0cm、最大径10.2cm、器高4.4cm、色調は明褐色であり、保存状態は悪く、器面の観察は不能である。

鉄鏝 遺物の出土状態で述べたように、14本出土した鉄鏝は1ヶ所にかたまっており、数等に入れて副葬したものであろう。従ってこの組合せは、この期に使用されている鉄鏝の組合せの一端を示すものと観る事が出来よう。

これらは大きく平根式のものと、尖根式のものとに分ける事ができる。図1～6は平根五角形式と呼べるもので、有縁のもの(1～3)と縁のないもの(4～5)がある。後藤守一博士の分類



第9図 第7号墳出土遺物実測図2 (鉄器)



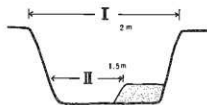
第10图 第8号填实测图

に従えば前者は有縁笠被両丸造五角形式、後者は笠被両丸造り五角形式と言う事ができよう。3は脇扶がある事が目に付くところであり、あるいはいわゆる飛燕形の鉄鎌と関係があるかも知れない。5は三角式と言った方がよいかも知れない。15は笠被の状態より先に述べた平根式に属するものであろう。尖根式とした7・8・13は刀身形のものであり、関はない。後藤博士の分類に従えば、長身片刃簡式と言う事になろう。9・12も長身であり有縁形式であるが、身が長く、恐らくこの仲間に含まれるものであろう。

4. 第8号墳

主体部は採土工事により失われており、封鎖部分及び常前域を残すのみである。

封鎖部分は偏平な河原石で構成されている。上部と下部とは積み方が異なり、上部では下部に較べて小形の河原石を使用し乱雑に積んでいる。封鎖部分から前方に約2.5m、巾1.5mほどの墓道が設けられている



墓道断面模式図

が、これは模式図のように改修のあとが認められる。すなわち当初巾約2mであった墓道であるが、一部分埋没した後にその一部を掘り下げて巾1.5mとして第2回目の墓道としている。このことは、封鎖の下部の石が、この中に埋没していることより明らかである。

このように封鎖石の積み方、墓道の改修等から、追葬の可能性が見出されるが、主体部が失われ、遺物が全くないため、これ以上の追求は不可能である。

V まとめ

今回の調査では工事中の発見であったためその多くの部分が調査に至る間に破壊されてしまい、比較的那の様相をつかめたものは、横穴1、占墳1であった。

古墳について

この種の古墳については、大谷純仁氏が森町・円明寺4号墳の調査において次の様に指摘している。「本墳の存する地形は山陵斜面であり、石室の架設が地表下に存在するもので、同形態の古墳は群集立地する点、円明寺古墳も例外ではなく比較的年代の下降することが指摘されよう。石室構造は横穴式石室でありながら羨道部を簡略化し機能を失ったものであって、いわば竪穴式石室の機能を有するものである。かかる石室は古墳築成終末近く古墳であって一般的な特徴といえよう。」(大谷純仁1966)。大谷氏はこのような例を横穴式石室墳とは別の呼称を提唱しているがその当否は別にして本墳もこの中に1資料を加えるものである。石室内には多量の河原石が落ち込んでおり、犬井石は現状では確認されていない。石室構築ののち上方より追葬を埋葬し、木あるいは石等でおおいかけたものと推察される。

内容のわかっている5基の古墳の築造年代についてみると、2号は出土している環により須恵器編年第Ⅲ期中葉と考えられる。1号及び4号は明確に決しがたいが、Ⅲ中〜Ⅲ後半をあて

※ 須恵器の編年については近江考古学研究会の編年を基本とした。(近江考古学研究会1966)

てよいと思われる。3号の時期判定はできないが、7号では前述のようにⅢ後半～Ⅳ前半と考えられる。すなわち、この古墳群は6C中頃より築造がはじまり6C末～7C初頭まで存続したと考えられる。

横穴について

今回の調査では3基の横穴が確認された。また今回の調査中附近の横穴の存在の可能性のある部分については、ボーリングメッシュ及びトレンチによる確認調査を行ったが、それ以上発見することはできなかった。

3基の横穴は、5・6号の墓前域を共有するグループと単独の墓道をもった8号の2群に分けることができる^{*}。

これらの横穴の時期判定資料としては6号より出土した広口壺及び平瓶各1点があるだけである。坪がないため明確にしがたいが、須恵器編年第Ⅲ期後半ないしⅣ期前半に位置づけられよう。

横穴式石室をもった第7号墳の平版と比較すると胴部のつくりはほとんど同じであるが6号出土のものでは頭部が若干長く直立する傾向を持ち口縁が外反し、口縁外側を三角にけずり沈線をも2段にめぐらしている。また胴部から肩部にかけての稜線が強くあらわれている。この差が時期差としてとらえるものかどうか現在のところ積極的な論拠に乏しいが、時期差と考えられるとすれば、Ⅲ中葉から古墳群が形成され、Ⅲ期後ないしⅣ期前半まで続き、第Ⅳ期前半からは横穴群が営まれていったと考えられる。

山本山古墳群はこれで全て消滅した訳である。従来石室をもつ古墳群と考えられていたものであるが、今回の調査で、横穴の存在が確認されたことはひとつの収穫であろう。しかし時期を明確に決定する資料に乏しく古墳と横穴との関係を明らかにできないことは残念である。

調査にあたっては地元の方々の絶大なる協力を得た。特に法多山尊永寺住職・大谷純仁師からは種々の御教示をいただいた。また、浜松市郷土博物館川江秀孝氏には鉄器の保存処理、実測をお願いした。記して感謝の意を表したい。

* 西側がすでに緑土により失われているため、何基によるグループ構成なのかは不明。地形等の観察によると2基以上の可能性が強い。8号も、東側に墓前域を共有する横穴があり、工事のためすでに失われてしまった可能性も考えられなくはない。

主要引用・参考文献

- 大谷純仁 1965 「谷坂 1. 2. 3 号墳」『東海道新幹線静岡県内工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 大谷純仁 1966 「森町四明寺第 4 号墳発掘調査概報」『静岡県埋蔵文化財要覧』1
- 川井正一 1972 「袋井市岩座古墳 D 単位群発掘調査概報」
- 静岡県 1930 『静岡県史 1』
- 後藤守一 1936 『原始時代の武器と武装』雄山閣
- “ 1942 「上古時代鉄器の年代的研究」『日本古代文化研究』河出書房
- 平野和男 1963 「袋井市地藏ヶ谷古墳群及横穴群発掘調査略報」
- 向坂鋼二・山村宏他 1965 「島田市水掛渡古墳群発掘調査報告書」静岡県文化財保存協会
- 山村宏他 1966 「大沢・川尻竈跡調査報告書」遠江考古学研究会

袋井市 山本山古墳群 昭和32年の調査

I はじめに

昭和32年12月、国学院大学教授樋口清之氏の指導により、下津谷達男氏、大谷純仁氏を中心として、約10日間にわたる発掘調査が行われた。古くから知られていたにもかかわらず、今回の調査以前に正式に調査されたものは、この大谷氏等の調査のみである。今回の調査がすでに主体部を削り取られた後のものであるだけに、山本山古墳群の様相を知るうえにその記録は非常に貴重なものである。

大谷純仁氏に調査報告を依頼したが、氏は法多山尊永寺の住職として多忙をきわめる御身体、そこで氏より資料の提供をいただき、整理してここに登載させていただくこととした。山本山古墳群がほとんど消滅してしまった今、貴重な資料を死蔵させてはならないと快く資料を提供された大谷氏の情熱・好意に深く感謝したい。

期 間 昭和32年12月21日～12月30日

対 象 古墳4基

調査指導 樋口清之（国学院大学教授）

調査参加者 下津谷達男（国学院大学助手）

大谷純一（同大学文学部学生）

杉山 蒨（静岡大学文理学部）

鈴木 隆（愛知大学経済学部）

森 郁夫（国学院大学文学部）

II 調査日誌抄

大谷氏の手許に、大谷・杉山・森・鈴木の四氏の日誌がある。できるだけ諸氏の表現を生かしながら整理した。調査の全般及び第2号墳に関しては大谷氏、第1号墳に関しては杉山氏の日誌による。

昭和32年12月20日（金）

調査のため、下津谷氏来袋井。

12月21日（土）

関係諸機関にあいさつの後、調査開始。今度の調査の対象の古墳を西より第1号墳・第2号墳・第3号墳と名づける。鈴木を中心として第1号、第2号の墳形測量を行う。下津谷・杉山・大谷は第3号墳の調査を進める。第3号墳は、今夏土排除のため石砌の大部分がくずされており、す

ぐ調査にはいる。その結果、石囲北西壁面より管下2個、鉄鍍片数片の出土をみる。

12月22日(日)曇りのち晴

第1号墳 石囲を露出することを主体として調査を進め、午前中に大体を完了。午後より大谷は第2号墳に着手する。

第1号墳 昨日露出したおおよそ東西に並ぶ1列の長さ2m程の石の列(側石と思われる)を基準にしてその南側の腐蝕土を約10cmほどはがしたところ、先の1列の石に並行して新たに1列の石が確認された。しかし、今日はまだ完全にそのプランを露出することができなかった。その正確な規模はわからない。遺物としては、須恵器の小片が表土の腐蝕土およびその直下で4～5片発見され、その他埴輪様の破片が2点出土していることは注日したい。また石室内部より土師器破片が出土している。

第2号墳 比較的石囲がしっかりとしており、大部分の石囲を露出することができた。石囲西北端より須恵器片出土。

12月23日(月)晴

第1号墳は内部主体の調査を継続。第2号墳は出土遺物の写真撮影。

第1号墳 奥壁にあたるところに比較的大きな石を確認しこれが縦に立っているらしいということから奥壁であろうと推定する。これによって石室の規模をはば明らかにすることができた。内部上体の発掘は数cm掘り下げたところで石室の西端南側の側石の最上段の石と次の段の石との接点と同じレベルで側石に平行して7本の鉄鍍と4本の鉄鍍の柄の残欠を発見した。また、中央部付近床面よりかなり浮いたところに須恵器破片数片を発見。またマウンドの中に径10cm前後の礫がやや多く認められたが、これが墓石であるかはまだ確実にはいえないが、その散乱状態やこの古墳のある合地に同様の礫を含んだ土層があることから、たぶん墓石ではないものと思われる。

12月24日(火)晴

第1号墳・第2号墳の調査継続。遺物の出土をみたため、本日より遺物保護のため現地に野営する。

第1号墳 石室中央部より西側に礫床と思われる小礫の面が認められた。この礫の面はその並び具合や側石との関係、さらには鉄鍍の出土したレベル等と考え合わせ礫床であることはほぼ誤りではないと思われる。礫床のある範囲の東端に3個の石が切り込んで確認されこの石の東側に提瓶と土師器破片が認められた。提瓶はほぼ完全なものと思われる。肩についた環は退化した把手状のものであり口縁部は外反する。土師器はつぶれているが環であろうと推定される。その他昨日出土した鉄鍍と同位置にさらに1本の片刃の鉄鍍が出土している。

第2号墳 石室上の石の排除と石室内の清掃を行う。石室内部南端より須恵器の出土あり。

12月25日(水)晴

樋口浩之先生、現地指導のため午後2時30分到着。各墳とも作業を継続するとともに、新たに第4号墳も発掘する。

第1号墳 石室内を清掃してその様子が大分明らかとなった。残念なことに中央付近が盗掘さ

れており、南壁中央部分の側石がはずされ、磔床が取り去られていることが明らかになった。この古墳の内部主体に関して特に注目すべき点は次の通りである。

- ① 磔床で側壁にそって空石部分があるがこの石は、石室内に埋葬した棺の規模を暗示しているように思われる。特に北側の石の列は、棺を置いたのち、その外に入れたと思われる如く縦に立っており、しかもその内側が一直線をなしていることはこれと平行して一直線をなす磔床の面と考え合わせて、この間の石の全くない2.5～3cmほどの場所に棺の北端があったものと思われる。尚、中央部西の3つの石はこの下に磔床があるかどうか確かめていないので断言できないが、明らかに磔床の面を切り込んでおり、今のところ上記の棺の外側においた石と考えてよいだろう。その線に考えると棺の大きさは147×32cmという細長い棺となり、大人の背巾、背文等と考えあわせると子供かあるいは体の小さい人間の墓としか考えられない。
- ② 石室 底部に敷きつめられた磔床をみるとその大きさが3種に大別される。奥壁付近は、2×1.5cm程の小さな石が敷かれ、棺のおかれた部分は4×3cm程の石が多数であり、入口部分においては、6×7cmの石が4×3cm程の石の中に混在している。この磔床の変化は、石室内部の配置を考えるうえで何ものかを示唆しているようにも思われる。しかし中央部西の3つの石の性格を明らかにしなければ断言できないことである。
- ③ 石室内の床の傾斜は西端から東端の奥壁にむかってごくわずかに傾斜になっているが、しかし立つほどではなく、全体的には3°～5°位の傾斜である。
- ④ 鉄錐出土の地点のレベルは磔床のレベルとほぼ同じ様であるが、あるいは数cm上がっているかもしれない。
- ⑤ 石室内の磔床が西端の部分に無いことに関しては一般例から考えるとやや不思議なことであるが、これは北側の側石が90°向きをかえて留石的な役目を果たしているのにこれがなく、また東隣にあるべき側石もないことからあるいはこの部分も荒らされているのではないか。

第2号墳 石室内清掃。遺物は須恵器の蓋環2組。その内1組は蓋を下にし身を上に載せた状態で発見され、さらに他の1組は身を北側にふせた状態で蓋を南側に正常に置かれてあった。蓋の位置が身より若干高く、おそらくこの蓋は床面よりわずかに浮いているものと思われる。すなわち蓋の下の上は黒味を帯び砂を多く含んでおりこの台地の地山とくらべれば、サラサラした感じである。身は床面と思われる粘土質を多分に含む層（地山ではないかと思われる）にかたくくいてみ、平におかれてあった。前に出土した須恵器はその北東部にあり環のみであるが、径5cm程の小體の上にふさった状態で検出され、両者の関係についてはなお明らかではないが注目すべき配置をもっている。現在すくなくとも5個以上の須恵器を数えるが、セットとしてみた場合2組の他に1個の須恵器が置かれていることになる。現在石室の石組みは北部の大部分を失っているが、最初想定していたごとく、盗掘にあったとするよりは、むしろ封土をけずった際に持ち運ばれたものと思われる。又、石組の上部に積み上げられた礫石は壁を構成するものがくずれたものと見るよりは、ただ雑然と積み上げた感じが強く、側壁は最下段の一重の石のみを想定するほうが無難である。

12月26日（木）小雨のち木降り

第1号墳・第2号墳測量。第2号墳は大谷・榛平で実測、遺物取り上げ。後、雨が強くなったため作業中止（1:00）

樋口先生、午前中現場指導後、地元早川氏宅の遺物の見学。午後1時より豊田氏宅において考古学に関する談話会に出席。午後2時14分発東京行で帰京。

12月27日（金）晴

第1号墳 石室プランの実測。スケール $\frac{1}{10}$ で、東西40cm間隔、南北20cm間隔の水糸をはり実測する。計測の結果

- ① 側石は持送りではなく、むしろ、逆梯子状をなすことが明らかとなった。
- ② 棺の規模を規定すると先の口誌で述べたが、その東端の石のさらに東隣りに1個の立った石があり、そのすぐ北隣りに礎床がないので、この石がはずされていたと考えれば、昨日まで東端の石とした1枚の石は棺内の枕石とも考えられる可能性も出てきた。しかしこの石を枕石と仮定しても、この石が立っており、しかも高さがやや高い感がある。

第2号墳 石室のプランの実測。南北に2本、東西に1本の水糸を取り測量を完了。当墳は過去において山道（尾根道）を作る為か、又は盗掘されたのか完全な石室ということは出来ない。現存するのは北面・西面の壁であるが、それだけでなく当古墳群の大部分が数段からなる積石の石室であるのに対して当墳は石室の石は1段しかない。しかし出土する須恵器の攪乱されていないところを見れば、尾根道を作る際の工事の為取りはずされたものと思ってよいと思う。

第4号墳 石組み平面図実測。第1号、第2号の石組みから見た場合、第4号墳はほとんど完全なものと思われる。

12月28日（土）曇り

1号墳 杉山により実測。縦断面2本、横断面1本終了する。南西隅にて鉄鍬7本取り上げ。

2号墳 森により東面・南面セクション実測。2号墳の調査はすべて終了する。

4号墳 石組（上部より3～4段）を取りはずし、内部に落ち込んだ礎石をとりはずす。東側壁に接し、ほぼ中央部に須恵器（反頸埴）の存在を確認する。尚この土器は他の古墳と異なり床面に立てられていたものと思われる。石室の構造はすでに排除された石を含めて7～8段積み重ねたものでおそらく高さ1m前後と考えられる。

12月29日（日）晴

第1号墳 プラン実測、午前中に完了。午後より断面図の作成にかかる。

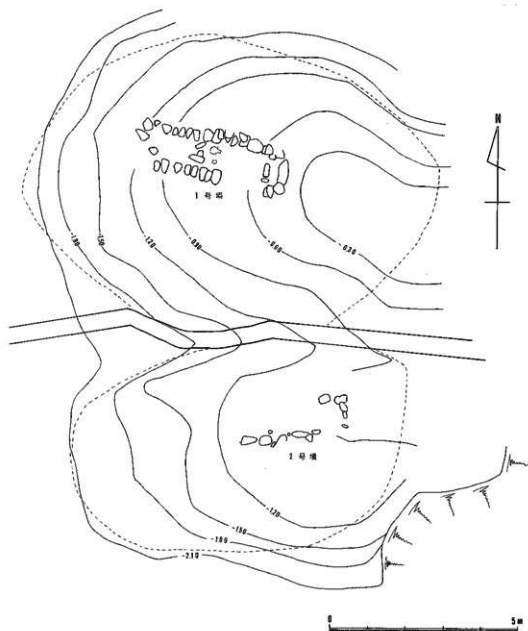
第4号墳 昨日に引き続き石室内の石を排除。午後より床面までの泥の排除に力を注ぐ。石室内の石の排除にあたり、数多い石の中に数個の火石がありその石が石室上の蓋石と思われる。また泥排除の際に付付埴、埴2個、勾玉（メノウ）、丸玉（ガラス）、刀の出土をみる。石室の高さは1m20cm位であり、崩れた石組を入れると高さは1m50cm位になることと推定される。

12月30日（月）晴

昨日遺物出土のため、昨夜は夜営をする。

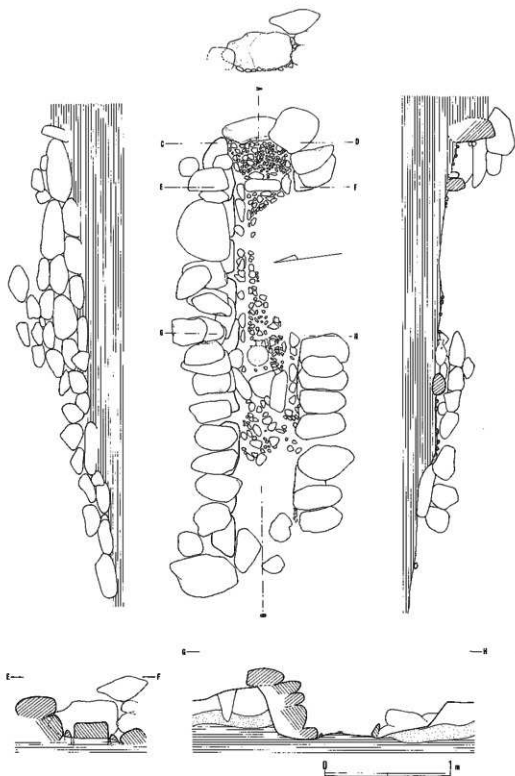
第4号墳 引き続き、石室内床面の清掃をする。提瓶の下より合付埴の蓋が出土。又、南面の上部にあるくずれた石組みをとりはずしたが、時間がない為に再調査をすることとして一応中止する。床面の実測を行い、遺物を取りあげ今回の調査を終了する。

III 各墳の概要

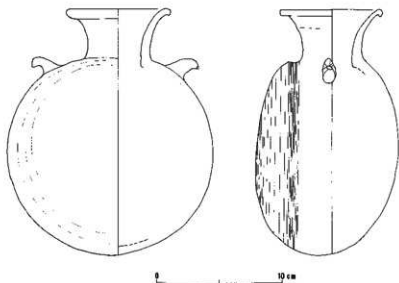
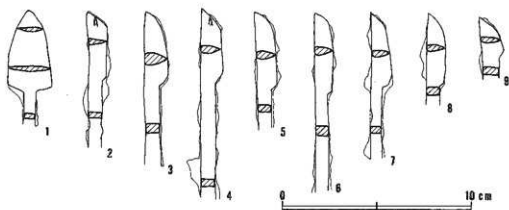


第11図 第1号墳・第2号墳地形図

1. 第1号墳



第12図 第1号墳実測図



第13図 第1号墳出土遺物実測図

横穴式石室をもつ円墳で推定径8m～10m程度。石室は比較的大型の河原石をもって築かれ全長約3.80m、巾約50cm。天井石はすでに失われており側石も2～3段を残すのみである。また石室内奥南半は盗掘のため側石がはずされ礎床が大きく取り除かれている。

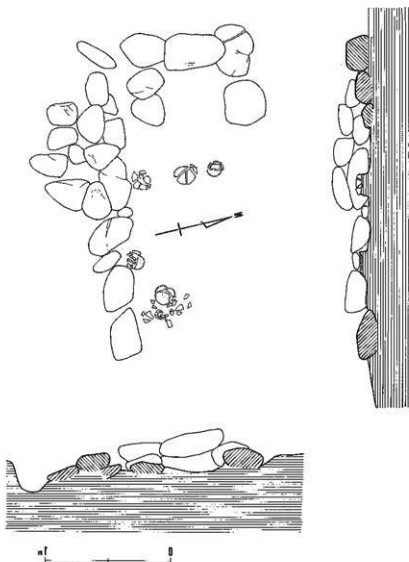
石室は大きく3つに区画される。四角い偏平な立石によって区画された奥壁部

遺物	数量	出土地区	状態	備考
須恵器 提瓶	1	石室内中央 小区画の西端	横位置、奥に 口縁をむける	国学院大
須恵器 杯	1個 体分	"	提瓶の南、床 面に接す	
土師器 杯	1個 体分	"	"	
鉄 鏝	10	石室内西隅 南側壁に接す	車になり先を 奥にむける	

出土遺物一覧

分と3個の石によって区画される前側部分と、それぞれに礫が敷かれているが、それを構成している礫の大きさが若干異なり奥 2×1.5 cm前後、中央 4×3 cm前後、前側部分は 6×7 cm前後の石が 4×3 cm前後、前側部分は 6×7 cm前後の石が 4×3 cm前後の石の中に混在している。この礫床の変化は石室内部の配置を考えるうえで重要である。

中央部の礫床を注意してみると巾 $2.5 \sim 3$ cmで礫の全く認められない部分が、北側壁に平行して1条、南側は盗掘のためわずかし確認できないが同じく1条それぞれ認められる。また中央部分の3つの石は明らかに礫床の面を切り込んでいる。これらの石はこの石室内に埋葬された棺の原模を暗示するように思われる。すなわち左右の礫のない部分に棺の側板がおかれその外に石が敷かれ、奥・入口部分も棺の側板の外に大きな石がおかれたものと理解される。とすれば棺の大きさは 140×35 cm程度の細長いものが想定できる。

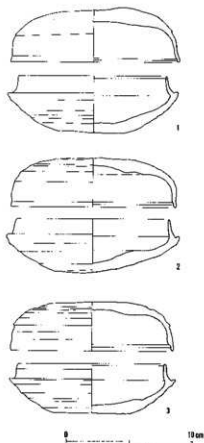


第14図 第2号墳実測図

2. 第2号墳

大きくこわされておりわずかに東側（奥壁か？）と南側壁が1段ないし2段残されているのみである。遺物の出土状態からみると盗掘と考えるより尾根道を作る際の工事により取りはずされたものか。巾80cm、長さはこわされているため不明であるが現状2.2mを確認している。

遺物としては須恵器杯3組（第15図）の他に杯の破片1個体以上がある。1組はセットになって出土し、他はそれぞれ別個にふせた状態で検出された。ほぼ同じ形態で、身の場合、最大径13.2～13.7cm、高さ4～4.5cm、口径11.5～12cm、受けの立ちあがり1.2～1.3cmで、須恵器編年Ⅲ期中葉に位置づけられよう。

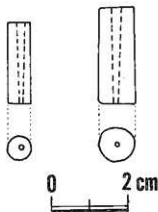


第15図 第2号墳出土遺物実測図

3. 第3号墳

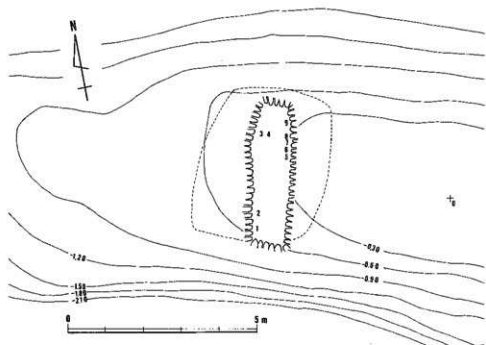
昭和32年の夏、土採取のため、大部分がこわされてしまっている。石室を構成した若干の石が残されているだけである。

北東から南西にかけて石室を斜めにかけてこわされており、北西の隅及び南東の隅に若干の河原石が残されている。残存部分の精査により、北西壁付近より菅玉2点、鉄鍬片数点が検出された。



第16図 第3号墳出土遺物実測図

4. 第4号墳



第17図 第4号墳地形図

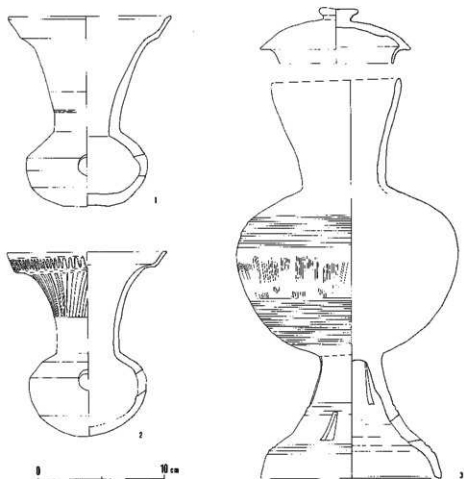
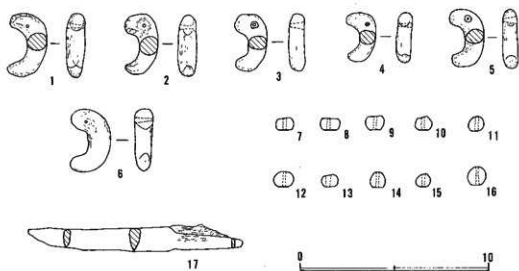
調査の時点ですでに石室上面は露出しており、封土は失われ、内部には天井側石がぐずれ落ちていたようである。この中には天井石として使用したと思われる石も9個認められたとのことである。

長さ約3 m 70 cm、巾約50 cm、河原石の小口積みである。

東側壁にそって、竈、台付長頸埴、埴瓶、埴がならび、西側壁にそって鉄鎌、勾玉等が出土している。

遺物名	数量	出土位置	第17図	状態	備考
須恵器 台付長頸埴 (蓋付)	1組	石室内中央部 東壁より	6・7	直立の状態 口縁部若干破損	国学院大
須恵器 埴	2	A 中央部東壁より B 土器列の最北端	5 9	直立 横	
須恵器 埴瓶	1	土器列の中央部	8	横位置、口縁部を 東壁にむける	
勾玉	5	石室内南側西壁付近 礎床上	1		メノウ製
丸玉	9	"	2		ガラス製
刀	1	石室内北部	3・4	刃を北東にむける	

第4号墳出土遺物一覧

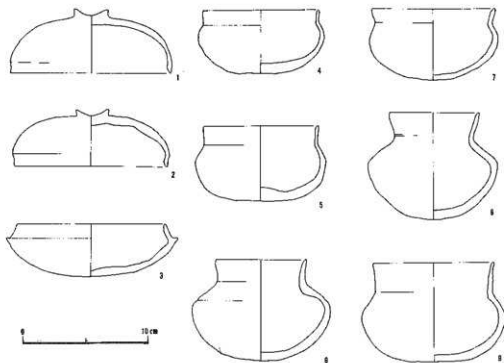


第 18 图 第 4 号坑出土文物实测图

山本山古墳群 過去の出土遺物

1. 袋井中学校所蔵遺物

大谷氏の資料中に菩提山出土・袋井中学蔵の注記のはいった実測図がある。当時借用して実測したものであるとのことである。現在実物の所在は不明である。



第19図 袋井中学校所蔵遺物実測図(大谷原図)

2. 袋井小学校所蔵遺物

調査中借用し、実測・写真撮影をした。出土地点、状態等は不明である。

須恵器(第20図)

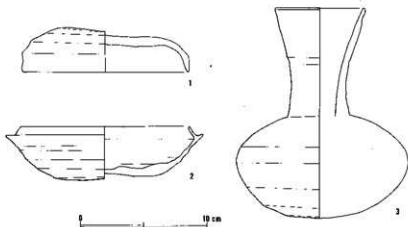
坏壺1、坏身1、長頸壺1がある。坏は蓋身とも変形が著しい。最大径は13.1cm、15.8cmと大振りで、須恵器編年第Ⅲ期中葉に位置づけられるものであろう。長頸壺は最大径13.7cm、口径7.0cm、頸部高8.6cm、焼成は良く頸部から胴部上面には自然釉がかかり灰黒色を呈する。底部は丸底でヘラにより整形されている。

鉄器(図版XIV)

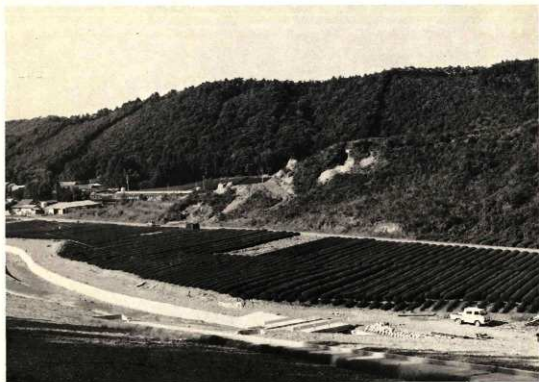
刀子、鉄鏃、飾り金具などがある。長年月を経ているため、鉄魂に化したものもあり旧態のわかるものはすくない。直刀の破片かと思われるものも認められる。

金銀(図版XIV)

3点ある。ともに表面は腐蝕をうけ鉄心が露出しているが全面に緑錆が付着し、金銅張りの痕跡がわずかに認められる。1は外径最大3.3cm、最小3.0cm、0.7cmφ、2は外径最大3.0cm、最小2.6cm、0.7cmφ、他のひとつは損耗著しく、残存部で径2.1cmをはかる。



第20図 袋井小学校所蔵遺物実測図



遺跡遠景



遺跡近景



第5号墳・第6号墳



第6号墳 封鎖石



第6号墳（上より）



第6号墳 封鎖石（内側より）



第6号墳 玄室内部



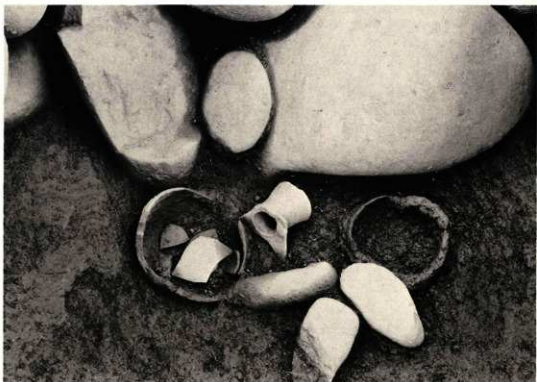
第6号墳 出土遺物



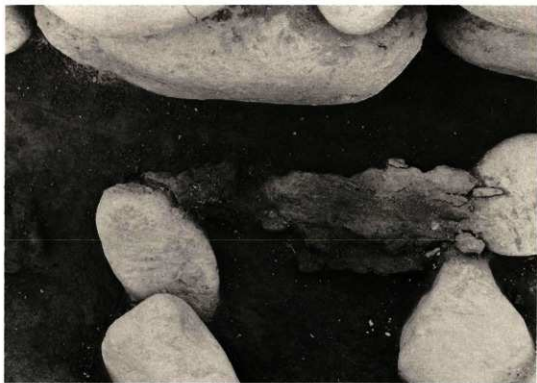
第7号墳 調査前の状況



第7号墳 石室内部



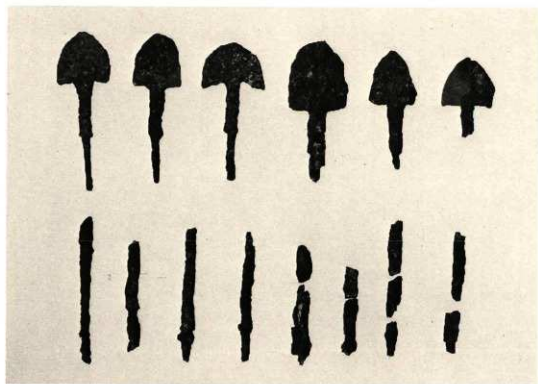
第7号墳 土器出土状態



第7号墳 鉄器出土状態



第7号墳 掘り方及び根石の状態



第7号墳 出土遺物（鉄器）



土師器



須恵器

第7号墳 出土遺物



8号墳 正面



8号墳 完掘状態

図版 X



1号墳 2号墳

3号墳



4号墳

山本山古墳群全景 (昭和32年撮影)



第1号墳 石室



第1号墳 奥室

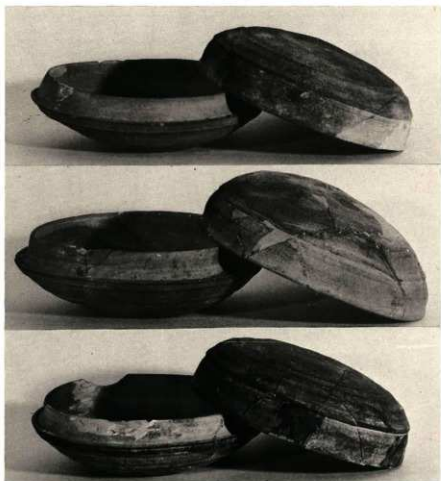


第1号墳 土器出土状態

第1号墳 出土遺物



第2号墳
出土遺物

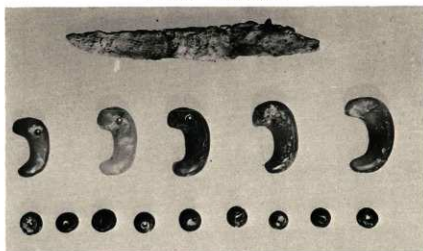




第4号墳 石室



第4号墳 土器出土状態

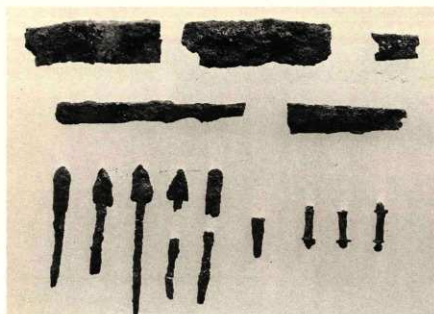


第4号墳 出土遺物 (玉類、刀子)



第4号墳 出土遺物 (須恵器)

鉄器



金環



須恵器



袋井小学校所蔵遺物

山本山古墳群

昭和50年3月31日

編 集 静岡県教育委員会
発 行 袋井市教育委員会
印 刷 株式会社 三 創